

The Confessions of Nat Turner における 語りと歴史と神の問題

田 中 久 男

The Confessions of Nat Turner (以下、本稿では *Nat Turner* と略記する) は、William Styron (1925-) の4作目の小説として、ランダム・ハウス社から1967年10月に出版された。年表上では歴史の単なる通過点にしか過ぎないこの年は、アメリカ社会では人種暴動が最も激しく燃えさかった年であった。しかし、この作品の胚胎はこうした時流には関係なく、作家は1949年頃すでに *Nat Turner* について思い巡らし始め、ちょうど *Sophie's Choice* (1979) 執筆に際して、アウシュビッツの強制収容所に関する文献を収集したように、*Nat* の反乱事件 (1831年にヴァージニア州南東部の作者の故郷ニューポート・ニューズの近隣のサウスハンプトン郡で起こった黒人の反乱) と、その時代背景となる奴隷制度についての資料を集め読んで、少しずつ執筆に備えていったようである。¹⁾ その上 Melvin Friedman も示唆しているように、²⁾ 1960年代初めに黒人作家 James Baldwin が Styron の家に5か月同居していたことで、彼は黒人の意識、内面に接近し、それを通して物事を見ることに自信を得たのではないかと思われる。

このように用意周到に完成した *Nat Turner* は、C. Van Woodward, Philip Rahv, George Steiner, Louis D. Rubin, Jr. 等による書評では、好意的に受け入れられ、³⁾ 友人の Baldwin にも好評で、⁴⁾ 翌年にはピューリッツァー賞を受賞することができた。が、予想通り、いや予想以上に大きな規模で、ブラック・パワー (Black Power) 運動に勢いがついていた黒人陣営から、*Nat Turner* への非難、攻撃が起こった。その結晶は、*William Styron's Nat Turner: Ten Black Writers Respond* という1968年の独立記念日に出された本で、これら黒人の文

人たちの主張は、“…the distortion of the true character of Nat Turner was deliberate. The motive for this distortion could be William Styron’s reaction to the racial climate that has prevailed in the United States in the last fifteen years … In addition to reducing Nat Turner to impotence and implying that Negroes were docile and content with slavery, Styron also dehumanizes every black person in the book.”⁵⁾ という編者の言葉に集約されるものである。歴史的な事実の歪曲と、黒人には反乱の英雄として神話化されていた Nat Turner 像が卑小化されているというのが、黒人側の主たる怒りの源泉であった。こうした怒りは、いわば黒人の領域に白人が、とりわけ南部出身の WASP (アングロ・サクソン系の白人プロテスタント) の作家が踏み込んで、勝手に荒し回ったという心情的な嫌悪感、人種的権利意識によって倍増した感がある。

しかし、歴史的な事実の歪曲という非難については、この作品を精読した歴史学者の Woodward が弁護してくれている——“I find that this work is not inconsistent with anything historians know about this event, or about the period. … but it seems to me a very valid and authentic use of history for the purposes of fiction. It seems to me to be faithful in its respect for history, not only in its consideration of events—facts—but in the way it views the time and the place in which these events happened.”⁶⁾ Nat Turner という人物の場合、少なくとも作者が述べているところでは、彼に妻がいたかどうかも明確ではなく、⁷⁾ 事実を確認する資料として頼れるものはごく僅かであった。即ち、Nat の裁判の弁護士を務めた Thomas R. Gray が、彼の告白を筆記してまとめた20頁 (約 5.6 千語) のパンフレット (“Confessions of Nat Turner”) と、事件についての当時の僅かな新聞の切り抜きと、サウスハンプトン郡の裁判の記録文書と、ジョンズ・ホプキンス大学で博士号取得を目指していた William S. Drewry というヴァージニア州出身の男が、1900年に著した *The Southampton Insurrection* という、かなり奴隷制擁護論に傾いている研究書だけであった。⁸⁾ このように当の事件についての

文献が少ないと、素人目には、Nat の反乱を小説として再構築する作業は、かなり苦しいものになるように思われるが、Styron は次のように述べている。

And as I read Nat Turner's original confessions I became more and more convinced of the beauty of what I was dealing with. Because I'd never seen a situation in history in which so *little* is actually known of the central figure, this allowing the writer to use his own intuition and imagination. ...if I'd been asked to do a novel about John Brown or Robespierre or anybody like that I would not have done it because too much is *known* to make any fiction credible.⁹⁾

Nat Turner の事件は、John Brown とか Robespierre の事件とは違って、確かなことがほとんど分かっていないが故に、作家はかえって歴史的事実という足枷に拘束されることなく、直感力、想像力をのびやかに駆使することができるというわけである。言い換えれば、物語のリアリティを保証してくれる最低限の歴史的事実と背景を尊重すれば、作家としてはそれで十分で、あとは自分の想像力を働かせて、小説という一つの自立した虚構の世界を創造すればいいわけである。¹⁰⁾

このような姿勢から最終的に出てきた *Nat Turner* は、Nat という黒人が、自分の生い立ち、事件までの生活、反乱事件と逮捕について、記憶を辿りながら告白する形態の一人称小説である。小説の質からすれば、当然この小説は「歴史小説」¹¹⁾と呼んでもいいはずだが、作者は小説の初めに置いている“Author's Note”の中で、これを“a work that is less an ‘historical novel’ in conventional terms than a meditation on history”と呼んでいる。彼があえて「歴史についての省察」という呼称を選ぶのも、この小説の一人称の語りの形式とも密接な関係がありそうで、手法の面では、このことが作者の最も心を砕いた部分ではなかったかと思われる。従って本稿では、先ずそれに絡まる問題を考察し、続いて *Nat Turner* で作者の大きな関心事であったはずの歴史と神の問題を追究してみたい。

1

Styronは前作 *Set This House on Fire* (1960) と次作 *Sophie's Choice* (1979) においても、*Nat Turner* と同じように一人称の語りを用いている。この形式は、現在進行中の *The Way of the Warrior*¹²⁾ においても使われている。こうした事実は、作者の一人称形式への偏愛ぶりを十分示してくれるし、作者自身そうした偏愛は、“immediacy”の効果を高め、語りに“a kind of authenticity”を与えるためだと説明している。¹³⁾ しかし、作者の自画像と容易に重なる人物を語り手に使っている他の3作とは違って、この *Nat Turner* の語り手は、アメリカ南部の奴隷制度の中で反乱を起こした黒人奴隷である。それにしても、なぜStyronはNatの視点を語りを選んだのだろうか。この問いに作者は、一人称形式は極めて1960年代の文学形態で、作家はますます個人的なスタイルで表現しようとしているということを第一の理由に挙げたあと、“I wanted to risk leaping into a black man's consciousness. Not only did I want the risk alone... but, by doing so, I thought I could get a closer awareness of the smell of slavery. For some reason, to register, to filter through the consciousness of the “I”, the first person, is often a very powerful way of getting at immediate experience.”¹⁴⁾ と答えている。Natの告白を筆記した弁護士Grayではなく、黒人Natの意識の中に飛び込んで、奴隷制度の桎梏に閉じこめられている黒人の感覚を通して、反乱が起こった土地の匂いと、それに関わり巻き込まれた人間たちの生態と、それらを取り巻く時代と社会の表情を、鮮烈につかみ取ろうとしたわけである。恐らく作者自身が言うように、白人の作家が黒人の意識に入り込んで、その視点から描くということは初めての試みだろうし、皮膚の色を越えて内面世界を描くことの不可能性を説くことは、James Baldwinの創作活動、あるいは*Othello*そのものの芸術的妥当性を否定してしまうことになるだろう。¹⁵⁾

これらの説明で、Styronが黒人の意識を通して語ろうとした理由は分かるし納得もできる。しかし、なぜ彼が黒人の内面に入ることに激しくこだわったのかは、必ずしも明白ではない。彼がWilliam Faulknerの作中人物について

評した次のような言葉に、それを考える一つのヒントは見つかるだろう。

Most Southern white people *cannot* know or touch black people and this is because of the deadly intimidation of a universal law. Certainly one feels the presence of this gulf even in the work of a writer as supremely knowledgeable about the South as William Faulkner, who confessed a hesitancy about attempting to “think Negro,” and whose Negro characters, as marvelously portrayed as most of them are, seem nevertheless to be meticulously *observed* rather than *lived*. Thus, in *The Sound and the Fury*, Faulkner’s magnificent Dilsey comes richly alive, yet in retrospect one feels this is a result of countless mornings, hours, days Faulkner had spent watching and listening to old Negro servants, and not because Dilsey herself is a being created from a sense of withinness : at the last moment Faulkner draws back, and it is no mere happenstance that Dilsey, alone among the four central figures from whose points of view the story is told, is seen from the outside rather than from that intensely “inner” vantage point, the interior monologue. ¹⁶⁾

確かに Styron が主張するように、Dilsey と同じく他の Faulkner の作品の黒人たちは、あくまでも外から観察 (“observed”) されていて、決して Faulkner が彼らになり代わって、彼らの内面を生きる (“lived”) というふうには描かれてはいない。これはなかなかの卓見で、“think Negro” することは、Faulkner の感覚では踏み込むのがためらわれた一つの聖域だったかも知れない。¹⁷⁾ この難題に Styron は敢て挑戦しようとしたわけで、そこには、処女作の *Lie Down in Darkness* (1951) 発表以来、南部作家という枠組の中で、Faulkner という偉大な先達の影響を指摘され続けることに対するある種の反発と、その先輩作家の成し得なかった点で勝負してみたいという気負いが感じられなくもない。¹⁸⁾

確かに、Styron が Nat という黒人の内面に入ろうとした動機には、このように Faulkner 文学のわたちの外へ出てみたいという強い願望が関わっていた

と思われる。が、何にもまして彼を突き動かしたのは、南部人として黒人の存在をしっかりと認識し、彼らを知らなければならないという心の要請であっただろう。このことは、*Nat Turner* 執筆の背景を著した “This Quiet Dust” (*Harper's* 誌の1965年4月号に発表) というエッセイの中に見て取れる。そこで彼は、南部の黒人たちは、その存在なくしては南部の風景が成り立たないくらい、その風景の一部になっているのに、白人と黒人は、何らかの摩擦からではなく、全くの接触の欠如から反目し合っているという悲しい状況とか、白人の黒人に対する偏見に触れたあと、“The Negro may feel it is too late to be known, and that the desire to know him reeks of outrageous condescension. But to break down the old law, to come to *know* the Negro, has become the moral imperative of every white Southerner.”¹⁹⁾ と述べている。一般にはただ黒人の反乱の首謀者ということでしか知られず、歴史に埋もれてしまっている Nat Turner を掘り起こし、彼に声を与えて彼自身の物語を過去から再生することは、南部出身の白人作家である Styron には、免れ得ない道義的責任であり、宿命であった。

このことは、また、過去と現在の持統を確認し、過去という遺産を真剣に受けとめようとする作者の姿勢の表明でもあるわけで、Faulker とか Robert Penn Warren の優れた作品に感じ取れる作者の歴史意識と全く同質のものである。²⁰⁾ 即ち、過去は単に過ぎ去った時制として、歴史の死体埋葬場に捨て去られるのではなく、現在の生きている人間の意識にどこかで微妙に作用し、時にはそれに影を落として支配するほどの暴力をふるうこともありうる、まさに生きた不可思議な力であることを認識し、そうした力が織りなす歴史の複雑な営みを、謙虚に振り返って見ようとする姿勢である。この姿勢は、Warren が歴史家と小説家の違いについて述べたときの小説家の本道を映し出すものでもある。Warren によれば、“...the historian does not know his imagined world; he knows *about* it ... But the fiction writer must claim to *know* the *inside* of his world for better or for worse. He mostly fails, but he claims to know the inside of his characters, the undocumentable inside.”²¹⁾ という

ことである。歴史家の関心事は、想像の世界の背後にある検証しうる事実であるのに対して、小説家の関心事は、記録に残ることのない人間の内面のドラマである。StyronがNatを薄暗い歴史の中から掘り起こす作業を思い立った意義も、まさにこの点にあった。それ故に彼は、「歴史小説」というレッテルを貼られるのを拒んだのである。この一般的な呼称から彼が思い浮かべたのは、通俗的な読者層をねらったメロドラマの類の小説のようで、²²⁾ そのような安っぽい作品の趣きを取り払い、もっと深い含蓄のある呼び方として、「歴史についての省察」という言葉を選んだのだ。

Styronの記憶によれば、*Set This House on Fire*を1960年に出版して暫くして*Nat Turner*を書き始める際に、題材の暴力的な面に筆が流れることを回避するために思いついた方策は、1962年に読んで感銘を受けたフランスの作家Albert Camusの*The Stranger* (1942年)の一人称の表現形式と、死刑を宣告された男が処刑される当日に、独房に座って思索している状況を用いることであった。²³⁾ つまり小説の中心に獄中の死刑囚を置き、その囚人の意識を通して語っていく方法である。更にこの回想形式をStyronに思いつかせたのは、Orson Wellesが製作し自ら主役を演じた*Citizen Kane* (1941)という映画を見たことだった。²⁴⁾ 即ち、Kaneの臨終の言葉だった“rosebud”(彼が子供のとき愛用した雪ぞりの名前)の意味を、一人の新聞記者が探求していくという形で、Kaneの生涯がさまざまな人物の回想の積み重ねによって組み立てられていくものである。このrosebudが、Natの場合には、彼が12歳の頃に、農機具を扱っている巡回商人がターナー農園に来て泊まったときの夕食の場で、主人のSamuel Turnerの妻のNellが、Natの才知のことを自慢して“columbine”²⁵⁾ という単語を綴るように言うと、彼が苦もなく綴って“the glory of self”(p.125)を感じたときの記憶に匹敵するものである。これらの作品の構成からヒントを得た*Nat Turner*では、反乱の暴力的な場面の描写は、総数428頁のうちの40頁ほどを占めるだけで、残りは、死刑の判決が下される日にNatが独房の中で、奴隷にしては恵まれた境遇にあった子供時代から、反乱が無残な失敗に終わったところまでを回想し思索することに費されている。こうしたこ

とを考えてみると、先ほど触れた“a meditation on history”という言葉は、この小説そのものの様態が、歴史についての省察であることを示すのは言うまでもないことだが、更に、作者 Styron が130年以上も前に起こった事件と、それを取り巻く時代とか土地とか社会の状況を省察してみる姿勢をも照らし出してくれるだろう。が、同時に、主人公の Nat が自己と自己の置かれた社会環境を省察しているということをも暗示しているのである。この意味で、作者が Nat の一人称視点に立って、彼の内面を生きながら記憶を紡ぎ出していく手法は、作品に“a meditative quality”²⁶⁾を付与して、現在点での Nat の自己省察、自己認識の姿勢を読者に伝える作者の優れた工夫であったと言えるだろう。

2

Styron はインタビューなどで繰り返し、Nat のことを“a religious fanatic”²⁷⁾と呼んでいるが、小説においても、Nat をそのように描いている。この「宗教的狂信者」としての Nat 像は、奴隷にしては比較的恵まれた境遇にあった彼が、反乱を起こしたことの内面的理由づけに必要なものであり、のちに触れる作品の構成にも関わってくるものである。“the children of the field hands and mill hands” (p.140) とは違って、母親の境遇の故に“a house nigger” (p.133) であった彼は、小さい頃から頭がよく、教育による黒人の知力の向上の可能性を信じている善良な彼の所有者 Samuel Turner から、“experiment” (p.155) として、当時の黒人には禁じられていた教育を施された。このことを Nat は、“Samuel Turner … could not have realized, in his innocence and decency, in his awesome goodness and softness of heart, what sorrow he was guilty of creating by feeding me that half-loaf of learning: far more bearable no loaf at all.” (p.156) と回想している。黒人奴隷の場合、十分一人立ちできる環境が整っていないところでは、生半かな教育は、悲しみを、不幸を、時には破滅をもたらしかねないことを、もちろん少年の Nat は知る由もなかったし、Turner も予想すらしなかった。屋内奴隷の身である Nat

は、その誇りの故に他の黒人の子供たちとの接触もなく、禁欲的な生活の中で暇と孤独を専ら “a study of the Bible” (p.173) に傾けるようになり、16歳の頃 Turner の妻の Miss Nell にクリスマスの贈物に聖書をもってからは、ひたすら聖書の世界に没頭していった。同時に彼は主人の計らいで、近くのドイツ人の大工から大工職を2年間教え込まれ (p.271)、Turner 自身に “the walking proof of what I have tried so hard” (p.191) と言わしめるほどになり、ゆくゆくはリッチモンドの Turner の知人のもとで大工として働き、“a free man” (p.193) になる夢を与えられる。そして農園では唯一の友達となった年下の Willis と沼に魚釣りに行ったとき、まるで天啓のように “the sudden presence of God” (p.205) を身近かに感じるという霊的な経験をし、初めての洗礼を Willis に行ない、それ以後、“I must bend every effort toward purity of mind and body so as to unloose my thoughts in the direction of theological studies and Christian preaching.” (p.207) と思うようになる。ここに「宗教的狂信者」Nat の芽が生まれたと言っていいだろう。

この時点までが Nat の人生の運の上昇期で、彼がそれとは知らず、Willis と3人の少年を闇の中で奴隷商人に手渡す手伝いをしたことが判明して、主人の Turner から苦しい弁明を聞かされたあたりから (pp.220-221)、彼の運命にかげりが出始める。ヴァージニア州の沿岸地方 (Tidewater) の土地がタバコの栽培のせいで疲弊し始めて不況に見舞われ、製材業を営んでいた Turner もそのあおりで負債を増やし、Willis 達が売られた事件から3年後の Nat 21歳の年に、結局は一家をあげてアラバマ州に移って行き、そこで再起を図ることになった (p.227)。従って彼が約束していた Nat の将来の自由は、バプティスト派の牧師である the Reverend Alexander Eppes にまかされることになったが、この聖職者のもとで Nat は1日18時間から20時間酷使され、“for the first time in my life I began to sense the world, the *true* world, in which a Negro moves and breathes” (p.240) と告白している。まさしく “two-legged chattel” (p.240) として動き回ることを余儀なくされることになったのだ。“half-man, half-mule” (p.241) の状態に突き落とされた挙げく、1822年2

月に460ドルで奴隷商人の手に売り渡され (p.245)、それから Thomas Moore に買い取られた。こうした Nat の運命の変転は、第2部 “Old Times Past” で回想されている主な物語である。

Moore のところで9年間使われた Nat は、子牛の誕生の際の偶然の事故で主人が死んだあと、未亡人の Miss Sarah が55歳の子無しはやもめの Joseph Travis と結婚したことで彼の所有物となるが、時折彼らの近隣の Whitehead 家に貸し出されることによって、彼が反乱の中で殺害した唯一の人物である Margaret Whitehead と知り合い、彼の聖書に関する並はずれた知識によって、彼女の信頼を得ることになる。その間彼は表面的には穏やかに暮らしているが、自由黒人 Arnold の置かれた経済的、社会的状況を見て、彼が自由の象徴どころか、“he exemplified by his very being an all but insoluble difficulty” (p.261) であることを鋭く認識し、彼自身は、“houndlike obedience” (p.269) の仮面を被る安全性と、またその屈辱とを同時に意識しているのである。そして、“it was not a white person’s abuse or scorn or even indifference which could ignite in me this murderous hatred but his pity, maybe even his tenderest moment of charity” (p.267) という感情にも悩まされる。この感情は、Faulkner の *Light in August* (1932) の Joe Christmas が、養父 McEachern の厳しさにではなく、養母の慈愛に反発を覚えるところに通ずるもので、Christmas 同様 Nat も、Styron の言葉を使えば、“a sense of his own worth as a human being”²⁸⁾ に固執するのである。表面での白人に対する従順さと、内面での人間の尊厳への激しい希求との落差、あるいは二重性が、Nat の心を苦しめていたことは想像に難くない。暇さえあれば彼がひたすら聖書の世界に、つまり “the vivid, swarming world of contemplation” (p.286) に引きこもろうとするのは、内面から湧き起こる白人への怒りと憎しみを抑圧しておくための、実に禁欲的な努力であった。

しかし、Nat が神の言葉として聖書から得たものは、魂に安らぎを与えてくれる慰めの言葉ではなく、“an almost unbearable hatred for white people” (p.286) に勢いを与え復讐を促す毒薬であったのだ。²⁹⁾ こうして彼

は、1825年の晩夏に森で5日間の断食を行なった際に、彼の“first vision” (p.288) を経験した。つまり、天空に黒い天使と白い天使が現われて、両者は剣を打ち鳴らしながら格闘し、最後に白い天使が負かされて、空のかなたに投げ捨てられてしまうという、神秘的だが怪しげなヴィジョンである。これを彼は、“let the oppressed go free” (p.292) のための神の啓示だと感じた。この天啓をはっきり復讐へ方向づけしたのは、Miss Sarah の兄の Nathaniel Francis が酔って、自分のところの奴隷である Will と Sam に、公衆の面前で白人たちの娯楽のために、闘鶏のように喧嘩をさせていた光景に出会ったことだった。こうして Nat は、“the whole world of white flesh would someday founder and split apart upon my retribution, would perish by my design and at my hand” (p.307) と心に誓い、その場にいた黒人たちに人間としての誇りを持つように訴える、彼としては“the first sermon” (p.308) を行なった。これ以後彼は、“inmost four” (p.332) としての黒人同胞——Hark, Nelson, Henry, Sam ——と密かに反乱の作戦を練り始め、1831年の7月4日の独立記念日に決起の予定が、8月19日にずれはしたものの、主人の Travis 一家を惨殺して次々に農園主とその家族を襲い、サウスハンプトン郡のエルサレム目指して進軍して行ったが、逃げた少女の通報で出動した州兵に鎮圧されてしまった。これがほぼ第3部“Study War”における告白の顛末である。

3

Nat は生涯で、“a warm and mysterious and mutual confluence of sympathy” (p.92) を感じた人物として、Samuel Turner と Margaret Whitehead の他に、Nat の裁判の判事を務めた Jeremiah Cobb を挙げている。Cobb は Herman Melville の *Billy Budd* (1924年出版だが、完成は1891年) の Vere 船長と同じく、私人としては犯罪者の人間性と境遇には深い同情と理解を示しながらも、判事という公人としては、社会が奴隷制という最大の人間悪を抱えてはいても、その社会の安定と規律を守る側に立たなくてはならないのである。今ではミシシッピー州とかアラバマ州などの深南部諸州の綿花栽培のための、“a

monstrous breeding farm to supply the sinew to gratify the maw of Eli Whitney's infernal machine" (p.69) になり下がっているヴァージニア州の忌わしい変貌と悲劇を嘆き呪い、奴隷制という南部の病巣に心を痛めている良心派というのが、小説の中でこの Cobb 判事に与えられている役どころである。Nat は死刑の宣告を受けるとき、彼と見つめ合って、"some rare secret — unknown to other men — of all time, all mortality and sin and grief" (p.106) を共有し合ったかのような感じを持つことができた。

しかし、死刑を控えて最も Nat の心を揺さぶったのは、反乱事件で彼が唯一殺害した18歳の Margaret についての記憶だった。"Oh, I wish there was some way that darkies could live decently and work for themselves and have — oh, real self-regard." (p.365) という言葉にこめられている黒人への憐憫の情とか、馬車に轆きつぶされたカメをひどく憐むエピソード (p.370) などが示しているように、Margaret は無垢で心根が優しい。そしてまた、奴隷解放反対を州議会で説いている父を持つ女友達と、学校で激しく口論する自由闊達な精神の持ち主である "a white Southern liberal"³⁰⁾ でもある。しかし、"Many conditions are required for the full fruition of this hatred, for its ripe and malevolent growth, yet none of these is as important as that at one time or another the Negro live to some degree of intimacy with the white man." (p.257) と Nat が告白しているように、彼のようにある程度白人の生活圏に親しく入り込める人間にとって、すでに触れた心理のメカニズムから言えば、白人の軽蔑とか無関心よりも、慈悲とか憐憫の方が、真の憎悪をかき立てるはずである。とすれば、この憎悪が Margaret に対する Nat の気持の一部に潜んでいたとしても不思議ではない。しかし、また彼は、真の憎悪とは幾分ずれている憎しみを覚えているのも事実である。例えば、彼は "why my hatred for Margaret is, if anything, deeper than my hatred for her mother" (p.340) という疑問には明確に答えてくれてはいないが、この疑問が発せられている彼女の下着用パンツ姿の場面 (pp.339-340) とか、小川のそばに二人きりでいる場面 (p.372) とかで、Nat が彼女に感じる押え

難い欲情を分析してみれば、彼女は可憐で無邪気であるが故に、自分が意図せざる形で相手の Nat を挑発して、当時の通念としては危険なほど、人種間の垣根を越えて親密になっていることに全く気づいていないことが、Nat にとっては呪いとも憎しみともなりうるのである。

しかし、このような憎しみにもまして、Nat の心の深い部分には、Margaret に対する愛があったことは間違いない。Styron は、“True, she might have had a buried passion for Nat because he was so much smarter than the white people she was associating with.”³¹⁾ と説明しているが、この彼女の「秘めた情熱」に応える形で、Nat も彼女に情愛を感じていたのではないかと思われる。作者は上の言葉に続けて、“he was smitten by her, this paragon of the unobtainable, in some obscure and perilous way so that the killing of her was not only a matter of working out his frustration but possessing her soul and body as well”³²⁾ と説明している。彼女は Nat にたとえ秘めた情熱を持っていたにしても、二人の間には踏み越えられない厳然とした黒白の皮膚の領域があり、それ故、彼は彼女を殺して思い出の中で生かすことでしか、彼女を所有する方法はなかったのである。弁護士 Gray から、今回の反乱で多くの無実の人々を虐殺したことに対して、何の心のうずきも感じないのかと尋ねられて、Nat は “No, Mr. Gray, I have no remorse for anything. I would do it all again. Yet even a man without remorse, in the face of death, may have to save one hostage for his soul’s ransom …” (p.403) と答えているが、彼にとって魂の贖いの一人の人質とは、言うまでもなく Margaret のことである。もし死を前にして彼に魂の救いが訪れるとすれば、それは彼女についての苦おしい記憶 (例えば、p.426) を通して、人間愛に目覚めることができる瞬間だろう。Nat Turner の構成も、そのような形で閉じられている。

第 1 部 “Judgment Day” の末尾で、Nat は “And if what I done was wrong, is there no redemption?” (p.115) と神に問うてみるが、何の答えも聞き取れないでいる。そして弁護士 Gray からは、“Christianity is finished and done with … And don’t you realize further that it was the message contained

in Holy Scripture that was the cause; the *prime mover*, of this entire miserable catastrophe? Don't you see the plain ordinary *evil* of your dad-burned Bible?" (p.111) という激しい言葉を浴びせられる。第4部 "It Is Done..." においても、Natは "I will go without Him because He has abandoned me without any last sign at all" (p.423) と考えて、上記と同じ問いを発している。第1部から彼を悩ましていた神との隔絶感は、いっこうに解消されないままである。しかし、Margaret に対する押え難い欲望と思い出の中から、かつて自分が彼女に教えたことのある聖書の一節が、彼女の声となって彼の耳に響いてくる—— "*Beloved, let us love one another: for love is of God; and everyone that loveth is born of God, and knoweth God.*"³³⁾ (p.426)。皮肉にも Nat は今まで大切にしていた聖書を通してではなく、殺してしまった彼女に対する愛を深く認識することによって、本当の意味での人間愛に目覚め、聖書の言葉を単に説教に使う言葉としてではなく、生きた魂の言葉として理解したのである。彼は自分を "an avenging Old Testament angel"³⁴⁾ だと見ていたが、Ratner の言うように、小説の結末では "God's Child"³⁵⁾ に変貌している。

このように閉じられる *Nat Turner* の構成とその意味を、作者自身が次のように実にうまく説明してくれている。

The last words of the book are the last words of the Bible, the last words of the Book of Revelation. I mean without revelation, the book doesn't make sense. It should be apparent that the book expresses the idea of Old Testament savagery and revenge redeemed by New Testament charity and brotherhood — affirmation.³⁶⁾

もう少し正確に言うと、第1部の冒頭に「黙示録」第21章第4節の言葉が置かれ、第4部の終わったあとに、Drewry の *The Southampton Insurrection* の一節に続いて、「黙示録」第21章第6-7節の言葉が付されている。つまり、Gray が Nat の反乱と告白の全体的な性格を記述した、「公示」と題する3頁半ほどの歴史的文書を、厳然たる重みを持った事実として先ず提出し、そのあとに、

Nat が旧約聖書の復讐の調子に促がされて反乱を起こし、いわば幻影にたぶらかされてしまった物語を、新約聖書の慈悲と同胞愛の言葉がすっぱり包み込む形になっている。その上、第1部における裁判が、白人の側からの復讐の一形態であり、Drewry が紹介している内容、つまり、白人たちが死刑された Nat の皮を剥ぎ、肉からは油を取り、その皮から財布を作ったということが、彼らの激しい復讐の精神を表していると見れば、白人たちの復讐の精神をも黙示録の精神が包んでいるという、実に意味深い構成になっている。

それにしても、Nat の夢の中の一つのヴィジョンとして、河が海に交わるところの屹立した断崖の上に、扉も窓もない寺院のような白い建物が立っている光景が、第1部と第4部の冒頭に現われているが、このイメージは何を意味しているのだろうか。これについて作者は、娘の Polly が見た夢からヒントを得たもので、それは全く“a mystery”であり、“It’s a mystery why I put it there, and Nat’s a mystery, and that’s a mystery within a mystery.”³⁷⁾ と、謎めいた答え方をしているだけである。Ratner はこの不可思議な建物を、“The temple, both womb and grave, is mysterious in its ‘purposelessness’.”³⁸⁾ と解釈している。この建物を「子宮と墓」の象徴と見るのは、卓見だと思われる。確かに、河から海へ入る場所と建物の閉ざされたイメージから考えれば、誕生と死という人類の最も原型的で普遍的なイメージを表わしていることのできるように思われる。が、“The relationship with God seemed to be the central thing in my own conception of the man [Nat].”³⁹⁾ という作者の言葉を重要視すれば、そして、この建物の描写に付着している“lonely”, “remote”, “purposelessness”, “high”, “serene” (以上、p. 4) とか、“stark white”, “pure”, “relic of the ages — of all past and all futurity — white inscrutable paradigm of a mystery” (以上、p. 422) といった語とか句が誘う連想からすれば、目的もないままに人間の世界を作って、あとはひたすら超然と人間の営みを見下ろしている神 (あるいは、宇宙の盲目的な意志の体现者としての神) の存在を象徴していると解釈する方が、作者の意図にはより近いように思える。⁴⁰⁾ 更にこの小説に引き寄せて解釈すれば、

恐らく、狭いところから広い自由な世界へ向って流れ出て行くことを夢想している囚れの身の Nat にとって、その意志を示すこともなく時空を超越している神は、世の中の非情ななりわいに苦しむ人間に、救いの手を差しのべることもせず、彼らのいわれなき不幸を凝然と見ている神の姿だとは考えられないだろうか。次作の *Sophie's Choice* への作者の関心の繋がりが⁴¹⁾の点から見ても、このように解釈することは十分許されるに違いない。

〔注〕

- 1) Styron はあるインタビュー (1965年9月) で次のように語っている — “Somehow I’ve kept this kind of amateur interest in slavery, and along about 1949, I began to gravitate back toward the idea of Nat Turner…” (Robert Canzoneri and Page Stegner, “An Interview with William Styron,” in *Conversations with William Styron*, ed. James L. W. West III [Jackson & London: University Press of Mississippi, 1985], p.65. 本書に収録されている James Jones との対話 [p.43] を参照)。また *The Paris Review* 誌の編集長 George Plimpton とのインタビューでは、“I kept up with the subject, constantly reading books on slavery, simply because it fascinated me.” (George Plimpton, “William Styron: A Shared Ordeal,” *New York Times Book Review*, 8 October 1967, p.2) と述べて、背景資料についてかなり調査したことを認めている。この作品は時流に関係なく書かれはしたが、現代アメリカ社会に対して持っている警世的、寓意的意味については、上記の Jones との対話の中で Styron が述べている。*(Conversations with William Styron, p.47. Cf. pp.95–96.)* R. W. B. Lewis も同様の考えを示している (*Conversations, p.83*)。
- 2) Melvin J. Friedman, *William Styron* (Bowling Green, Ohio: Bowling Green University Popular Press, 1974), p.13.
- 3) Friedman, p.45.
- 4) *Conversations with William Styron*, p.82.
- 5) John Henrik Clarke, ed., *William Styron's Nat Turner: Ten Black Writers Respond* (Boston: Beacon Press, 1968), p.viii.
- 6) C. Van Woodward and R. W. B. Lewis, “The Confessions of William Styron,” in *Conversations with William Styron*, pp.85–86.
- 7) Ralph Ellison, William Styron, Robert Penn Warren, C. Van Woodward, “The Uses of History in Fiction,” in *Conversations with William Styron*, p.135. Friedman は、Thomas Wentworth Higginson が、1861年8月号の *Atlantic* 誌に発表した “Nat

- Turner's Insurrection” という記事の中で、Nat の妻のことを述べている部分を紹介しているが (Friedman, p.48)、Styron はこの情報を全くの噂話として退けている (Conversations with William Styron, p.106)。但し、作者自身も構想の段階では、Nat に妻子がいた可能性を考えていたようである (Arthur D. Casciato and James L. W. West III, “William Styron and The Southern Insurrection,” *American Literature*, 52, No. 4 [1981], 569)。
- 8) Canzoneri and Stegner, pp.67-68, および William Styron, *This Quiet Dust and Other Writings* (New York: Random House, 1982), pp.15-16 を参照。上記の Casciato と West III の調査によると、作者は、ニューヨークのセントラル・パークの設計者として有名な Frederick Law Olmsted の *A Journey in the Seaboard Slave States* (New York: Dix & Edwards; London: Sampson Low, Son & Co., 1856) から背景資料を学んだようである (Casciato and West III, 573-577)。
- 9) *Conversations with William Styron*, p.195.
- 10) 作者は注7のパネル・ディスカッションにおいて、“...a brute, an idiotic preoccupation with crude fact is death to a novel, and death to the novelist. The primary thing is the free use and bold use of the liberating imagination...” と発言している (Conversations, p.132)。マルクス主義歴史学者の Eugene Genovese は、“A novelist has room for an imaginative reconstruction. Many of Styron's critics refuse to recognize that a novel is a novel — even a historical novel is. The demand for historical exactness, if yielded to, would reduce every novel about historical figures to political hack work, which is invariably bad politics as well as bad art.” (Friedman, p.47) と明快に主張している。
- 11) ちなみに、ある「文学用語辞典」では、‘historical novel’ の項を、“A narrative which utilizes history to present an imaginative reconstruction of events, using either fictional or historical personages or both. While considerable latitude is permitted to the historical novelist, he generally attempts, sometimes aided by considerable research, to recreate, with some accuracy, the pageantry and drama of the events he deals with.” と説明している (Karl Beckson and Arthur Ganz, *A Reader's Guide to Literary Terms: A Dictionary* [New York: The Noonday Press, 1960], p.75)。
- 12) この作品の一部は、すでに *Esquire* 誌の1971年9月号に、“Marriott, the Marine” というタイトルで発表されていたが、同誌の1985年8月号に、やはりその一部となるはずの作品が、“Love Day” として掲載された。
- 13) Robert K. Morris, “Interviews with William Styron,” in *The Achievement of William Styron*, ed. Robert K. Morris, rev. ed. (Athens: The University of Georgia Press, 1981), p.49.
- 14) Douglas Barzelay and Robert Sussman, “William Styron on *The Confessions of*

- Nat Turner: A Yale Lit Interview," in *Conversations with William Styron*, p.103.
- 15) Plimpton, p.2. Cf. George Core, "The Confessions of Nat Turner and the Burden of the Past," in *The Achievement of William Styron*, p.215.
 - 16) *This Quiet Dust*, p.13. 同じ主旨の発言は、Alice Rewald とのインタビュー (1967年) の中にも見つけられる (*Conversations with William Styron*, p.81)。
 - 17) 優れた Faulkner 論を書いた Irving Howe も、"It may be said that precisely Faulkner's awareness of the distance between the races and of the ultimate inaccessibility of the Negroes make him hesitate to use a Negro as his center of consciousness." (*William Faulkner: A Critical Study*, 2nd ed. [New York: Vintage Books, 1952], p.132) と述べている。
 - 18) Cf. Morris, p.32, および *Conversations with William Styron*, pp. 6-7, 24, 30, 54-55, 105, 111, 239.
 - 19) *This Quiet Dust*, p.14. 同書の pp.10-11 を参照。
 - 20) ここで言う「歴史意識」とは、Woodward が Allen Tate の言葉として紹介している "the peculiar historical consciousness of Southern writers" という句が表わすものであり、そうした意識が生み出した文学を、Tate は "a literature conscious of the past in the present" と呼んでいる (*Conversations with William Styron*, pp.115-116)。
 - 21) *Conversations with William Styron*, pp.118-119.
 - 22) Cf. *Conversations with William Styron*, pp.86, 95, 122. 作者は *Nat Turner* を、ある意味で "a psychological novel" と呼んでもよいと考えている (同書、p.70)。
 - 23) Plimpton, p.2. Friedman は、Marcel Proust の *Remembrance of Things Past* (1913-1927) も、*Nat Turner* の創作に影響を与えたのではないかと推測している (Friedman, p.14)。
 - 24) Cf. *Conversations with William Styron*, pp.196, 225.
 - 25) William Styron, *The Confessions of Nat Turner* (New York: Random House, 1967), p.124. 本稿におけるこの作品からの引用は全てこの版により、頁数を括弧内に示す。
 - 26) 作者自身がインタビューで使っている言葉 (*Conversations with William Styron*, p.86; Cf. p.95)。
 - 27) Plimpton, p.34. *Conversations with William Styron*, pp.58, 68, 99, 100, 138, 193.
 - 28) Plimpton, p.32.
 - 29) "Of all the Prophet it was Ezekiel with his divine fury to whom I felt closest by kinship..." (p.52) と Nat は告白している。作者も、"I really saw Nat as a man profoundly motivated by the empathy he feels with the old prophets, Ezekiel, Jeremiah, Isaiah." とインタビューで説明している (*Conversations with William Styron*, p.88)。
 - 30) Plimpton, p.30.
 - 31) Plimpton, p.32. Margaret 自身、小説の中で、"when I tell the girls at school they

- just don't believe me when I say I go home on weekends and the only person I can talk to is a — is a darky*” (p.91) と述べている。
- 32) Plimpton, p.32.
- 33) この「ヨハネの第一の手紙」の第4章第7節の言葉が出てくる場面は、本文の p.368.
- 34) *Conversations with William Styron*, p.88.
- 35) Marc L. Ratner, *William Styron* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1972), p.119. Arder Cheshire も、“Nat thinks that he reaches God (a Christian God of love and mercy) through his communion with another human being.” と述べている (Arder R. Cheshire, Jr, “The Recollective Structure of *The Confessions of Nat Turner*,” in *The Achievement of William Styron*, p.234)。
- 36) Plimpton, p.34. *Conversations with William Styron*, pp.79, 88, 96 にも、作者による同じ主旨の発言がある。
- 37) *Conversations with William Styron*, p.226.
- 38) Ratner, p.104.
- 39) *Conversations with William Styron*, p.72.
- 40) 作者は “the universe is fairly indifferent and doesn't care” と言っているが (*Conversations with William Styron*, p.191), ここでの universe を God と言い換えても同じだと思う。実際 Styron は処女作から繰り返し、少し安易過ぎるほどに、神の存在への不信感を陰に陽に表明している。それらの例をごくわずかにだけ列挙してみても、“life is just one huge misunderstanding and God must be really sorry for confusing the issues so” (*Lie Down in Darkness* [New York: The Viking Press, 1957], p.116), “that black, baleful and depraved Deity who seemed coolly minded to annihilate His creatures” (*Set This House on Fire* [New York: Bantam Books, 1981], p.430), “The query: ‘At Auschwitz, tell me, where was God? And the answer: where was man?’” (*Sophie's Choice* [New York: Random House, 1979], p.513) という文章が見つかる。
- 41) 作者は Morris とのインタビューで、“As with Nat's rebellion, I wanted to deal with the Auschwitz experience as a big moment in history.” あるいは、“Our beautiful opportunities which we have as human beings are absolutely destroyed because of our proclivity toward hatred and toward massive domination of each other. That is slavery and Auschwitz!” と述べている (Morris, p.59 および p.57)。別のインタビューでも同じ主旨のことを述べている (*Conversations with William Styron*, pp.197, 199)。作者の関心の繁がりについては、拙論「*Sophie's Choice* 試論——選択と罪悪と運命」(『広島大学文学部紀要』第44巻 [1984], pp.153-175) 参照。

The Confessions of Nat Turner : Narrative, History, and God

Hisao TANAKA

The Confessions of Nat Turner (1967), William Styron's fourth novel, is written, like most of his other works, from the first-person point of view. This device is an attempt on the author's part to grasp "a closer awareness of the smell of slavery" by leaping into the consciousness of a black man, Nat Turner. To avoid a melodramatic rendering of the violent aspects of the Southampton insurrection, however, Styron chose to employ, as in Albert Camus' *The Stranger*, the way of telling the story through the eye of the condemned and in the style of recollection as in Orson Welles' *Citizen Kane*. This choice, arising from the author's own deep sense of history, serves to give the novel "a meditative quality," as he wants it to be "a meditation on history."

Nat was taught to read as an "experiment" by his one-time master, Samuel Turner, the experiment which, though frustrating his dream of becoming a free Negro in the harsh slavery, eventually arouses in him "a sense of his own worth as a human being." Through a study of the Bible, he falls into a religious fanaticism which leads him to the idea of letting the oppressed go free by exterminating all the white people. The figure of Nat as a religious fanatic is needed to provide the inner validity for his insurrection.

Save for Samuel Turner and Jeremiah Cobb, the judge at Nat's trial, Margaret Whitehead is the only person with whom Nat could feel a mutual confluence of sympathy. In part I of this novel, "Judgment Day," he feels

dissociated from God, and even in the last part, "It is Done...", he feels he can find no redemption. Still, at the last moment of his life in the jail, he feels he reaches God through his memory of Margaret: Nat as "an avenging Old Testament angel" has finally changed into Nat as "God's Child." Structurally, as Styron asserts, "the book expresses the idea of Old Testament savagery and revenge redeemed by New Testament charity and brotherhood—affirmation."

The image in the novel of the white building standing on the promontory facing out upon the sea is a mystery. Yet, if we respect the author's words, "The relationship with God seemed to be the central thing in my own conception of the man [Nat]," we may interpret the building as a symbolic image of God.